2019年12月15日

Kudo Ballet School
Newsletter vol.46

2019年を振り返って!



＜2019年1月＞

DLS教師講座

RAD CPDワークショップ、RADジャパン新年会

英国ロイヤル・バレエ団ダンサーによる

特別講習会(p9-p10)

＜2019年3月＞

伊達バレエコンペティションに参加



＜2019年5月＞

Spring Event for Student

DLSワークショップ参加

ふれあいフェスタに参加(p10)

＜2019年6月＞

RAD試験(p8-p9)

＜2019年7月から8月＞

星山八海、カナダ・ヴィクトリア・アカデミー・オブ・バレエに留学(p11-p12)

第29回インターナショナル・サマースクール・イン東京

＜2019年8月＞

甲府スタジオ第30回デモンストレーション(p2-p5)

＜2019年9月＞

横浜スタジオ第26回デモンストレーション(p5-p7)



＜2019年10月＞

片桐優、ポルトガル国立バレエ団に研修生として入団(p15)

川崎章弘氏ワークショップ「バレエダンサー、パフォーマーのためのコンディショニング」(p7-p8)

RAD試験(p8-p9)

＜2019年11月＞

えびす講まつり(p10-p11))

＜2019年12月＞　クリスマス会

●デモンストレーション

＜甲府スタジオ＞



甲府で工藤バレエスクールがデモンストレーションを始めてから第30回目を迎えた。会場は、甲府市総合市民会館。以前、1、2度、使用させていただいたことはあるが、かなりの広さの舞台に驚き、舞台の大きさを感じさせないような踊りを見せることが、私の指導における目標の一つともなった。老朽化のため、照明設備やエアコンの不具合等を除けば、楽屋と舞台が近く、袖も広々としており、使い心地は決して悪くない。

第1部は小品集。ソロ（一人で踊る）の作品や、登坂先生のコンテ作品が並ぶ。一人で踊るということは、広い舞台やライトを独り占めできるという心地よさもある一方、失敗したらどうしよう、という不安もあるだろう。それが故に、練習に励む必要があるのだ。どこまで出来るようになりたいかは、各々のゴール設定に委ねられる。こちらがアドバイスしようとも、本人が、そのアドバイスを受け入れ、実行するということに繋げなければ、より良いものを観客に見せることはできない。今回、私がよく伝えたことは「苦手な箇所ばかりに目を向けず、出来るところをもっと磨こう」ということ。決して、苦手な箇所を克服しなくていい、というわけではない。出来ていると思う箇所を磨いて行くことで、踊り全体の輝きが増すのだ。短所や苦手なことばかりに目が行きがちだが、長所や、改善した箇所、得意なことなどに目を向けるということは、自己認識には欠かせないのではないだろうか。



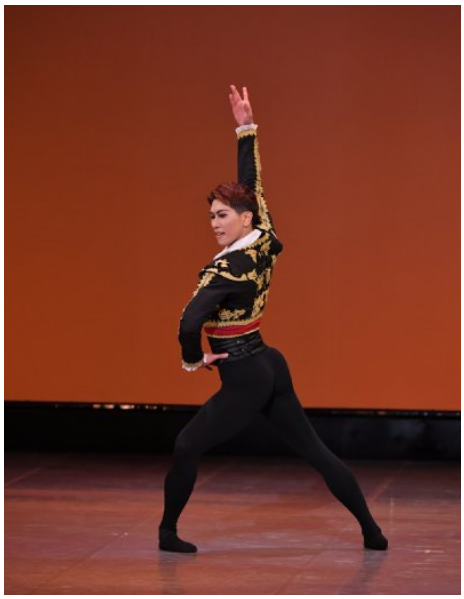
登坂先生のコンテ作品「重心を下に持つ小作品」「Voce està aqui?」。皆中学生以上ということもあり、表現のある踊りが求められる。バレエのように一糸乱れぬ動きが要求される一方、気持ちが同じ方向に向かっている統一感も出さねばならない。バレエのような明確なプロットがあるわけではなく、動きを通して、音楽を通して、自分が感じたままを踊りにのせてゆく。ハプニングもあったが、観客に「何か」は伝わったのではなかろうか？



第2部は、「ロイヤル・アカデミー・オブ・ダンス」（以下RAD)クラスの一部を紹介。RADのシラバスは、そのレベルを勉強しようとしている生徒の身体的発達、認知的発達、精神的発達を考慮して作られている。足のアーチが形成されるのが、7歳ぐらいとされているため（それまでは皆、扁平足！）、8歳ぐらいまでは、ターンアウト（股関節の外旋）を多用するような内容よりも、身体を大きく動かすこと、メリハリを動きに持たせること、音楽性、パフォーマンス力などを磨くことが重視される。グレード3あたりから、バレエ特有のステップ

が増え、ターンアウトを維持したままの動きも多用されるようになる。さらにレベルが上がるに連れて、複雑性が増してゆくのだ。もちろん、RADが提供しているシラバス内容は、エンドプロダクト、すなわち、RAD試験でその評価のために準備されるものではなく、教師は、そのエンドプロダクトを目安に、多くのステップ、準備を重ねてゆくことが求められている。その準備において、サプリメントとしてのエクササイズを欠かすことはできない。
デモンストレーションのリハーサル、本番では、各々が自分の出番に合わせて、身体を整えばならない。そのため、どんなウォームアップ（多少汗ばむ程度）が良いのか、どんなエクササイズをすると、使いたい筋肉や体にスイッチが入るのかを考えてゆくことが必須。半年ぐらいかけ、レッスン前に間食をとることも推奨。レッスン時間が長くなればなるほど、体内にエネルギー源がなければ、きちんと動くことも、集中することもできない。空腹の状態でも動くことはできるが、使用しているエネルギー源は、臓器が使用しているものらしい。間食の内容は、動いていて、気持ち悪くならないものを選ぶことをテーマに、中学生以上は、食事の他に、間食も考えて用意したはず。

第3部は、原振付マリウス・プティパによる「ドン・キ・ホーテ」より「夢の場」「婚礼の場」を上演。工藤バレエスクールとしては初の試み。今まで、3幕のグラン・パ・ド・ドゥは何度もご覧いただいている。現在、ルーマニア国立バレエ団で2シーズン目の廣本侑優と、新国立劇場バレエ団のソ





リストとしてご活躍中の中家正博先生をゲストとして迎えた。二人の最初のリハーサルに立ち会った時、振付を確認しているだけなのに、もう出来上がったのでは？と思うほど、鳥肌が立った。「これがプロなのか！」と。しかしながら、リハーサルを重ねて行くうちに、廣本の生真面目さが段々と目立ってくるようになった。ルーマニアのバレエ団では、当たり前だが、1シーズン、コール・ド・バレ



エ（群舞）ばかりである。コール・ド・バレエ は、全員で動きも音の取り方も、表情も揃うことが要求される。ミンクスの平坦な曲調の影響であることも否めない。本番が近づくに連れて、1年ぶりのパ・ド・ドゥということもあり、不安感も増していったようだ。廣本の特技は、メリハリがあり、人前だと輝きが増す踊り、絶妙な音楽の取り方、踊るのが大好きを身体全身で醸し出すことなどではないか。
パ・ド・ドゥは、指定されたカウント通りに踊る事も大切だが、互いに相手を待つ事も必要。中家先生



のご尽力もあり、本番には、廣本本来の踊りを取り戻すことができたような気がする。

「夢の場」では、ドルシネア、森の女王、キューピッド、妖精たちで構成される。初めてコール・ド・バレエを経験する生徒も多く、最初のうちは、かなり混乱していたようだ。ソリストが踊っている間、舞台の端などで、身体にスイッチを入れたままで立っていなければならない。もちろん、どこを考えると少し楽になるかなどを指導した上で、数分間、立っているだけの練習もした。一番、大変なのは、コール・ド・バレエなのである。大抵ソリストは、袖に引っ込み、水分を摂ったり、汗を拭いたりする事もできるが、コール・ド・バレエは舞台にずっといなければならない。バレエ好きな生徒たちは、頭をフル回転させ、取り組んでいたことは、喜ばしいことであるし、今後、困難な状況に直面しても、乗り越えることのできる原動力となるはずである。圧巻だったのは、ロンドンに留学し3年目の白川のジプシーの踊り。2年次の授業課題でもあったようで、表現が入念に作り込まれていた。（この授業の評価は学年トップ。）「えみは、オペラハウスに住んでいるの？」と同級生に揶揄されるぐらい、バレエ鑑賞をし、踊るとは何か？をしっかり取得したものであったのはないろうか。



ドルシネア、森の女王、キューピッドを踊った、河埜、須田、中川の3名にとって、初ソリスト。小品集で一人で踊ってきたり、コンクールに出場してきてはいるが、幕物の中で、ストーリーテラーになるのは初めてのことであった。踊りを覚えるだけではなく、コール・ド・バレエを引っ張って行く責務が課せられる。本人たちが、どこまでそこを意識していたのかは分からないが、かなり楽しんでいたことは、舞台の袖から見ていて、理解できた。

「怪我からの贈り物」

須田　千由利（高校1年生）



デモンストレーションの2日前、急激な膝の痛みに襲われた。早く痛みが収まればいいと考え、痛み止めを打った。次の日には、だいぶ痛みがやわらいでおり、治った！これで本番では踊れる！とまで思っていた。そして迎えた本番。痛めていた方とは逆の足を捻挫してしまい、気持ちがすごく落ち込んでし

まった。その後も プチハプニングが続き、無事に最後まで踊りきれるかすごく不安になってしまった。なんとか終えることができたが、課題が沢山残るデモンストレーションであった。私はこのデモで残した課題をうけて、このままではいけないと思い、肉体を本気で変えようと決心した。それから私は、毎日少しずつできることを増やしていこうと決めて、毎日トレーニングをした。初めはできないことの方が多く、正直続けるのが辛かった。しかし、続けていくうちにできることがふえ、レッスンでも強くなってることが実感できるようになった。プリエが深くできるようになったり、膝の過伸展も前より良くなったり目で見える成果はとても嬉しいものだった。この経験を過去のものにはせず、これからもトレーニングを続けて、安全にかつ強いバレエをめざしてこれからも努力を続けていきたい。



＜横浜スタジオ＞

9月21日(土)第26回デモンストレーションが、青葉公会堂で行われました。今年は当スタジオにとって、初めて挑戦する演目である「ドン・キホーテ」を中心に進め、練習を進めてまいりました。教師側も、この「ドン・キホーテ」の演目は、前々から、取り組んでみたい！という思いがありましたので、今回挑戦することができて良かったですし、子供達も、楽しみつつ学ぶことも多くあったのではないかと思います。

デモンストレーションは、第1部小品集、第2部ロイヤル・アカデミー・オブ・ダンス・クラス、第3部小品集、第4部ドン・キホーテの4部構成でした。



今年の小品集は、初めて参加する生徒達もおりました。小品集で踊るヴァリエーションは、それぞれの演目によりけりですが、バレエ団によっては、ソリストやプリンシパルが踊るような、難易度の高いヴァリエーションもあります。それを踊りきるということは、大変なことですから、ステップ一つ一つを分析して、丁寧に踊る必要があります。つまり、練習の時には、踊りに含まれるステップを、まずは分解して練習してみて、スムーズに出来るようになったら、動きを繋げてみたり、段階に分けて、工夫して練習する必要があります。小品集の練習の際に、生徒達が少しずつ、そのことを理解して、練習する様子が見えました。

普段の練習で出来ることも、本番は緊張して、体重が後ろにいきやすくなったり、頭が真っ白になって何も考えられず、普段以上に出来ないこともあるかもしれません。だからこそ、レッスンや練習の時から、気をつけるべきこと(姿勢やターンアウト等)を考える必要があるでしょう。最終的には、すごく考えなくても、身体に身につけて、自然に出来るようになれたらいいですね。本番は、どの生徒も戸惑うことなく、今出来ることを、精一杯取り組んでいた姿が見えましたし、一人一人が輝いていました。(普段は笑わない生徒も笑顔が見えたり笑)

また、今回も、NBAバレエ団からゲストとして、森田先生をお招き致しまして、舞台に華を飾って頂きました。パドドゥは、ほとんどの場合、15〜20分間、踊り続けなければなりません。その中で、集中



力を高めつつ、踊りきることは、本当に大変なことです。パドドゥに挑戦した林さくらさんも、本番ではその役柄を演じきっていたと思います。
また、第2部ロイヤル・アカデミー・オブ・ダンス・クラスでは、PPPからG7までの生徒達が、RADのシラバスのエクササイズや、ダンスを踊りました。毎年行われてます、このRADクラスですが、子



供達が、バレエを通して、成長していく段階・過程が、よくみられたのではないでしょうか？ レベルが上がるごとに、エクササイズも複雑となり、求められることも多くなっていきます。しかし、年ごとに、出来ることが増えていき、また、それを通して、成長が見られるということは、嬉しいことです。
第4部の「ドン・キホーテ」は、第2幕と第3幕の抜粋という形で、上演致しましたが、音楽のテンポも良く、非常に明るい作品なので、子供達も練習の時から、とても楽しんで取り組んでおりました。
第2幕「夢の場」では、ドルシネア姫を始め、この世のものではない、現実を感じさせない、夢の中の雰囲気をつくらなければいけません。妖精達の手の動かし方、目線の位置一つで、その場面が、表現されるのです。舞台に上がり、照明がつき、生徒達もイメージを膨らませていたのか、本番が1番、その



夢の場に合った雰囲気を表現できていたのではないでしょうか。主役のドルシネア姫は、飯塚美友さんに演じて頂きました。
第3幕は、それぞれのグレードごとに、役柄を演じました。セギディリア(G3-5)は、扇子の使い方に最後まで、苦労しておりましたが、本番は大きく、明るく、派手に、生徒達の表情に笑顔も見れました。モレノ(PPP)は、練習の時から、エネルギッシュにとても高いジャンプをしており、感心しておりました。フリフリしているチュチュに合わせて、子供達がスカートを振っていたのが、とても可愛かったですね。





ジーグ(PP-P)は、曲自体は少し長めの作品で、人数も多く、リハーサルと本番に、初めて全員が揃いましたが、場当たりもスムーズに出来、昨年からの成長が見えました。ボレロ(G1-2)は、各バレエ団のドン・キホーテ中でも上演されないことも多い、ヴァリエーションです。新しいステップも多く、苦戦しておりました生徒達も、本番はメリハリをつけて、かっこよく踊っておりました。ファンダンゴ(G6-8)は、それぞれ足元の動きだけではなく、上半身、特に背中を使うことを意識して、踊りを大きく見せ、大人の女性らしく上品に見せられるように練習しておりました。舞台上では、1番上のお姉さんらしく、大人の女性らしさが魅せられたのではないでしょうか。主役のキトリは、昨年まで当スタジオに在籍しており、現在スターダンサーズ・バレエ団のジュニアカンパニーで活躍しております巻田恵瑠さんに演じて頂き、明るく素敵で華のある舞台をつくって頂きました。



最後に、デモンストレーションは、保護者の皆様のご協力がなければ、成り立たないものです。今年も、責任者の飯塚さんを始め、保護者の皆様が、デモンストレーションの前から本番の次の日まで、沢山のお手伝いをして下さり、また、日頃より生徒達のサポートをして下さったことに、心より感謝申し上げます。子供達が、バレエを通して、人として成長し、また、舞台に立つことの楽しさや喜びを、より一層味わえるように、教師一同、益々精進してまいります。



・教師が参加した講習会

「川崎章広氏　バレエダンサーとパフォーマーのためのコンディショニング」

現在ヒューストンバレエ団、アカデミーにて、ストレングス＆コンディショニングコーチをされている川崎章広さんの講習会へ参加しました。もともとヒューストンバレエにはストレングス＆コンディショニングコーチという役職はなかったのですが、ダンサーの怪我を減らしたいという思いから章広さんが上の人に掛け合い、できたそうです。バレエの世界では科学的なトレーニングを使っての身体作りはほかのスポーツに比べるとまだまだ浸透していないのが現状です。しかしヒューストンバレエでは何年もかけて年間140件以上あった怪我を86件まで減らすことに成功し、実績が認められました。今回は大きく分けて二つのことを教えていただきました。一つ目はウォームアップです。ダンサーにとって有効なウォームアップで、その場所でできるものと場所を必要とするものです。ウォームアップでは心拍数を上げ、身体を温め、筋肉を動かしやすくします。ただ床に座って開脚をするストレッチなどは逆

に筋肉を弱らせ、踊りにくくしてしまいます。深く腹式呼吸をしながら体をゆっくりと動かすだけでうっすら汗ばむほど体が温まっていくのを感じました。
二つ目はダンサーのケアとして、アナトミートレインという筋膜の流れをいくつかのルーティンとして著しているものを紹介していただきました。筋膜の流れに沿ってボールを使ってほぐしていくと効率的であること、筋膜の流れを知っているとほぐしにくい筋肉も流れの一部分をほぐすことでほぐれるそうです。実際に体験し、いつも硬くなりやすい筋肉をほぐすことができ、参加者ほぼ全員が「いたたたー！」と悲鳴をあげるほどでした。今回の講習会を通してダンサーにとってのウォームアップ、ケアの重要性を再認識しスタジオでも実践しております。怪我をしない体づくりをこれからも意識して指導してまいりたいと思います



・RAD試験

＜6月のグレード試験＞

今年は、ヴィヴィアン・クウオク先生を試験官としてお迎えし6月にグレード試験が行われました。当スタジオでは、54名が受験し、全員が合格する事ができました。

RADでは、それぞれの年齢や成長に合わせ、技術や表現力、音楽性などを段階的に習得していきます。プリ・プライマリーでは単純だった動きが、グレードが上がるに連れ、ターン・アウトが加わり、移動



が伴い、徐々に方向性が複雑になり、音楽的にも複雑になって行きます。
クラスの中で、「この動き、小さい頃にやったけど、どのエクササイズか覚えてる？」と聞くと「わかんな〜い。忘れた〜。」と言われる事もしばしば。「忘れちゃうから、今、これが出来ないんだよ！」とプリ・プライマリーやプライマリーのエクササイズを一緒に踊ってみる事もあります。そんな時、子供達は忘れたと言いながらも、「ここに気をつけてと言われたよね。」「タイミングはこうだったよね。」と小さい時に言われた事をしっかり覚えています。「同じ事が少し（凄くかも知れませんが…）難しくなっただけで、ここでも同じ事をすれば良いんだよ。」と言うと格段に上達する事もあります。



そんな時、段階を踏んで、バレエを習得して行く事の大切さを感じます。そして、RADのシラバスには、本当に大切な事が沢山詰まっているんだなと思います。
RADの試験は、ただ漠然とレッスンをするのとは違い、目標をもって、各年齢に必要な事を細かく練習をする機会を与えてくれます。そして、その練習は試験だけでなく、今後のバレエの習得にも繋がっていきます。
また、試験を通して、バレエだけでなく、様々な事で目標を持って努力し達成する事の大切さ、人前での立ち居振る舞いなども学ぶ事ができます。今年もグレード試験を受ける事で、それぞれ大きく成長したことと思います。

＜10月のヴォケーショナル試験＞



10月にはヴォケーショナル試験が行われ、インターミディエイト・ファンデーション、インターミディエイト、アドヴァンス・ファンデーション、アドヴァンス1という4つのレベルで7人が受験、合格いたしました。
ヴォケーショナル試験は、バレエ教室やダンサーを目指す生徒の為の試験で、アドヴァンス1を良い成績で合格するとフィリース・ベデルス・バーサリーというロンドンで行われるコンクールに、アドヴァンス2を良い成績で合格するとジュネ国際コンクール（2020年より、マーゴット・フォンティーン国際バレエ・コンペティションに名称が変更される）に出場する事ができるます。そのため、グレード試験と比べ、より正確なポジション、テクニックが必要なだけでなく、より高い音楽性や表現力も求められます。
ヴォケーショナル試験はデモンストレーションと同じ時期に行われるため、今年も集中して練習できたのは1カ月ほどでした。生徒達は、限られた時間の中、身体の使い方、時間の使い方、水分補給や食事などについても考慮して練習を行いました。
今回、得た事を次へと繋げて行って欲しいですね。

・ワークショップ

＜特別講習会＞

英国ロイヤルバレエ団プリンシパル・ダンサーのラウラ・モレーラ先生をお招きし、マイムクラスと、バレエクラスをご指導いただきました。
マイムクラスでは「白鳥の湖」よりオデット姫とジークフリート王子が出会うシーン、「眠れる森の美女」プロローグよりカラボスの登場シーンを丁寧に教えていただきました。
まず、物語と役柄の説明から入り、一つ一つのマイムの意味をデモンストレーションしながら教えていただきました。ラウラ先生がオデット姫、リラの精、カラボス、王様、王妃、式典長、ネズミ、やさしさの精、カナリヤの精と目まぐるしく役柄を変えるたびに、その役柄になりきってしまうのに参加者は見入っていました。始めは恥ずかしさもあり、動きが固くなってしまう人にも、ラウラ先生は顔の表



情や全身を使って「もっと意地悪に！優しいわよ！」などの声掛けをしながら表現を引き出してくださいました。最後には皆ノリノリで意地悪なカラボスを演じることができていました。舞台を観る際に踊りだけではなく、より表現に注目することができたり、自分が踊るときに気を付けることができるきっかけになったのではないでしょうか。



バレエクラスでは、手先の使い方、足裏のアーチへの意識、脚を長く使うなど技術面のアドバイスがありました。今も第一線で活躍されているからこその説得力。また、それ以上に音楽の使い方、目線を使っての顔の表情を意識することも数々のステージを経験されているラウラ先生だからこその注意でした。そして特に印象に残ったのは、センターでのアレグロ。指定された音楽からはなかなか創造のできないパを作っていくラウラ先生。一音一音を正確に読み取り、瞬時にステップを当てはめていく姿は見事でした。付いていくのが難しいところもありましたが、皆必死に踊っていましたね。とても良い経験になったと思います



・いろいろ！

＜ふれあいフェスタ＞



5月25日(土)に、中川ふれあいフェスタに参加致しました。15名の生徒達が参加し、RADのエクササイズやダンスを披露致しました。暑い日差しの中でしたが、野外で踊るのには、気持ちのよい風が吹き、青空の下で子供達の笑顔が輝いておりました。
ふれあいフェスタの舞台は、スペースが狭く、踊る場所が普段よりも限られており、場当たり等もありませんでしたが、子供達は迷うことなく、堂々と練習した成果を発揮しておりました。発表会の舞台とは違い、客席との距離感が近いため、また発表会とは違う緊張感もありましたが、生徒達が踊ってる時の、生き生きとした表情が、間近で見られたのではないでしょうか。この地域の方々に、工藤バレエスクールを知って頂く良い機会となりました。

＜えびす講まつり＞

えびす講祭りも、第69回目を迎えたそう。
甲府スタジオの生徒も毎年参加させていただき、今や定例行事となりました。
11月23日当日、前日からの雨も朝方には止み、少し、肌寒い中ではありましたが、生徒たちはいつも通り元気よく踊っておりました。
生徒の着替えの時間を使い、当スタジオのレッスン内容の紹介、トーシューズを履くということはどういうことか？を説明させて頂きました。説明に頷いていらっしゃる方もおり、安全なバレエを主軸にし



ていることは伝わったことでしょう。レッスン内容の紹介では、可愛いゲストも参加！
終了後、いつも通り、メイクをきちんと落とさず、スタジオを駆け出してゆき、しばらく経ってから、両手に色々と抱えて、戻ってきておりましたね。

・海外にいる生徒便り

＜星山　八海（中学3年生　カナダ）＞



今年の7月21日から一年間カナダのヴィクトリアに留学しています。辛いことも楽しいこともなんとか乗り越えて半年がたちました
まず初めにサマースクールが三週間ほどあったのですが肉体的にも精神的にも一番つらかった三週間だったと思います。英語に全く慣れていない状況で環境も180度変わり、不安しかありませんでした。しかし、自分が知っている知識の中で先生の言っていることを理解しようと先生が言っていることだけに毎日集中するようにしました。そうすると一回一回の授業でとても疲れるようになりましたが、それと同時にレッスンの達成感も感じられるようになりました。

サマースクールが終わりすぐに新学期が始まりました。私は現地の公立に通っています。始まってすぐに友達はできたものの、自分からなかなか喋ることもできず学校に行くのが憂鬱になった時期もありました。そこでまず友達が言っていることを理解する



ことから始めました。そうすると自分の耳がだんだん英語に慣れてきて、少しずつ自分も声を発して喋るようにしていきました。絶対一気にすべてができるわけではないと確信していたので、一個ずつ問題を解決していくようにしました。
また私が一番落ち込んで悩んだことがあります。新学期からのバレエレッスンです。自分でも理由がわからずクラスが少し落とされました。何が悪いのかわからない、みんなと自分の違いが分からない、とひどく落ち込み二日に一回は泣いていました。だけどよくよく考えたときに、何が悪いのか知らなければなにも変わらないでただ泣いて一年が終わってしまうと思いました。そこで私は自分のどこが悪いのか先生に聞いてみました。
すると、先生はターンアウトが足の付け根からできていないと私に教えてくれました。そしてそのあとのレッスンで自分が思っている以上にターンアウトができていないことに気づきました。そこから私は泣くことをやめてターンアウトで使う筋肉を強化したり、足先だけじゃなくて、太ももの裏側からやりすぎなんじゃないかと思うぐらいにターンアウトす



るように心がけるようにしました。そうすると今までのレッスンより何倍も疲れることを実感しました。今でも時々、太もも裏側の筋肉を忘れることがありますが、すぐ姿勢を整えてターンアウトするように心がけています。そうすると前より先生からターンアウトのことで褒められることが多くなりました。この時栄先生に相談に乗っていただき、ターンアウトのエクササイズをたくさん送っていただいたり、どうしたら改善できるかを一緒に考えてくれました。私は栄先生がいなければ乗り越えられなかったと思います。この経験から、自分だけの力ではなくて周りの人に支えられていることを改めて実感しました。

このようにずっといいことばかりではなく、半年の間でたくさん辛いことがありました。でもそんなときに小さいことから解決方法を考えてきました。”最悪”から後退することはないと考えてとりあえず



やってみようと思うようになりました。これから半年間もたくさん良いこと悪いことあると思いますが、そのたびに自分ができる小さい方法から解決していこうと思います。そして、全てのことを楽しみながら、少しでも成長できるように前向きに取り組んでいきたいと思います。半年後、皆さんにお会いできるのを楽しみにしています！

＜白川　英未（ロンドン）＞



早いもので9月から最終学年(3年目)がスタートしました。

学業と同時に卒業後のことも考えなくてはなりません。有難いことに学校の先生方がたくさん相談にのってくださり少しずつ動き出しています。夏休みには皆さんに報告ができるように頑張ります！

さて学校生活ですが、3年生の1番大きな課題はDissertation(卒論)。現時点ではトピックの絞り込みやリサーチの方法を学ぶレクチャーがメインで2学期になると自主学習の時間が増えるようです。今学期は選択モジュールの中からパフォーマンス、必修科目の教育学のセオリーと実践の3つの授業があります。(選択モジュールはパフォーマンスの他にコレ



オグラフィー、ダンスサイエンス、ダンスヒストリーがあります。)

パフォーマンスの授業では自分の得意なことを中心に振り付けを考え、グループ作品を作る授業と2つのレパートリーを習う授業で構成されています。今年はマクミラン版ロミオとジュリエットの1幕からジュリエットのソロとフォーサイスのIn the Middle, Somewhat Elvatedから一部のパートを習っています。対照的な雰囲気の作品、しかもなかなか学ぶことのできない作品なのでとても楽しいです！

ソロシール(来年6月に受験予定)の授業では今ライモンダのソリストを学んでいます。1週間の中で異なる時代の作品をいくつも踊れることは幸せなことですね。

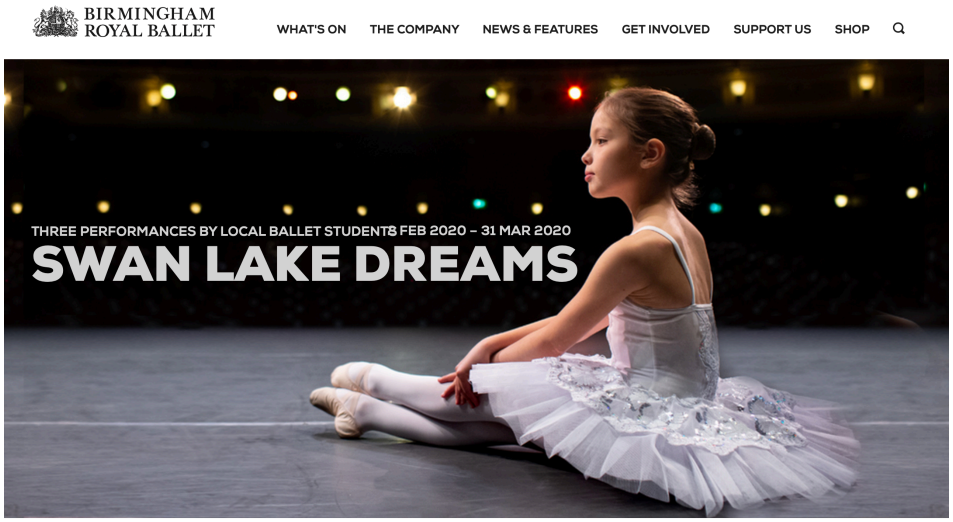
昨年に引き続き、教育実習も毎週あります。今年はPrimary、G1、G6の3クラス。小さい学年は20人を超えるクラスで名前を覚えるのにも一苦労(笑)。基本的にG6クラスをフルで教え、あとはアシスタントをしています。2年間イギリスのバレエ教室で教えていて、小さい時から「趣味で楽しむためのバレエ」と「ダンサーを目指して専門的に学ぶバレエ」がしっかり分かれているように感じます。教育実習では特にメンターの先生のやり方に従うよう言われているので少し窮屈に感じることもありますが、色々な経験が将来役立つだろうとポジティブに考えることにしました。

幸いなことに、昨年の実習先の先生からAdvanced Foundationのクラスを任せていただき、「あなたのやりたいように教えていいわよ」と言われています。とはいいつつも毎週1時間(生徒さんたちはその他グレードのレッスンを1時間取っているのみ)、ポアントを履く時間もその中に入れなければならないという条件は変えられません。毎週のプラン作りは大変ですが、とても一生懸命レッスンに励んでくれるので嬉しいです！

学校の話はここまでにして、、、。

9月にバーミンガム・ロイヤル・バレエが主催するSwan Lake Dreamsのオーディションを受け、2月にバレエ団の本拠地である劇場でパドトロワ、白鳥のコールド、スパニッシュを踊る機会をいただきました。

申し込み時点ではプロジェクトはバレエを習っている全ての人に舞台で踊る機会をというモットーで99歳までの方が対象と書いてあったのです。どんなレベルのものなのか全く分からずに第一次のオーディションへ。会場に着くと、Royal Ballet schoolやElmhurst Ballet Schoolなど有名なバレエ学校のパーカーを着た生徒さんがたくさん。後で分かったことですが、彼女たちはAssociate(ロイヤル・バレエ・スクールのプレ・スクールのようなもの。もちろん





オーディションがあります。)に在籍中でした。オーディションはたったの45分。ウォームアップ後、すぐにコール・ド・バレエのステップや3幕のキャラクターのステップを踊りました。先生は1-2回しかお手本をみせてくれません。ステップが正しく踏めていること以外に覚える早さも審査されていたと思います。最終的に何人選ばれるのかも分からないまま第二次のオーディションへ。この時にはすでにある程度の配役が決まっていたようです。スタジオに入るとすぐに「名前を呼ばれた人だけ〜を踊ってください」と次々に言われ、各ソロやコールドの難しいステップを含むシークエンスが審査されました。私はほぼ全てに名前が呼ばれたので必ず何かは踊りたいとアピールを頑張りました(笑)。その気持ちが伝わったのかな？

最終的に70人に絞られ、10月下旬からリハーサルがスタートしました。(応募数は300人を超えていたようです。) 主役のオデット/オディール、王子、ロットバルトはBRBのダンサーが踊ります。さすがに99歳の方はいませんが、年配の方も何人かいらっしゃって王妃役やそのお付きの役などを演じます。リハーサルは配役ごとに予定が決められており、3/4の幕に出る私は毎週リハーサルがあります。ロンドンからバーミンガムは電車で約2時間。(そしてイギリスの電車はすぐにキャンセルされたり、30分遅れだったりと日本では考えにくいことが頻繁に起きるのです。)学校の授業は午前中に終わるのでそのまま夕方のリハーサルに直行、終わりは21:00なので寮に戻る頃には日付が変わっていることがほとんど、、、。3年目になって少し余裕ができたからできることです。

クリスマス休暇に入る前に全ての振り写しが終わりました。バーミンガムロイヤルバレエの白鳥の湖はピーターライト版。パドトロワに王子が入って最後はパドカトルになったり、3幕のプリンセスたちはソロを踊ったりと多少の演出は違いますが、基本的には皆さんの知っている振り付けです。マイムのシーンも多く1幕では王子と少し組んだり、3幕は黒鳥側の人間なので王子が裏切られるシーンでは高笑い(私の得意分野...笑)したりと演じる部分も多くあります。現段階ではオリジナルの振り付けに忠実に踊っているかが重点的に指導されますが、ソロではスタジオは舞台と同じくらいの広さがあるので場所取りや細かい角度の付け方などどうしたら綺麗に魅せれるのかポイントを絞ってコーチングしてもらっています。あと約2か月。当日は生オーケストラ演奏の中BRBの衣装と装置の中で踊れる幸せを噛み締めるために自分ができる準備はきちんとやりたいと思います！イギリスのバレエ教室では日本のように綺麗な衣装を着て舞台で踊るという経験はほとんどできません。参加者がみな目をキラキラさせてリハーサルしている様子を見ていると私も嬉しくなります！



かなり多忙な日々ですが、時間のあるときは友人と食事に行ったり、バレエやコンサートに出かけたり、美術館でのんびりしたりとロンドンライフも楽しんでいます。
2020年はRADが100周年を迎えるにあたって色々なイベントが予定されています。V&A美術館では100周年記念の展示会が行われるようです。また皆さんにもレポートしますね！



廣本侑優　近況報告（ブカレスト）

ルーマニア国立バレエ団（ブカレスト）にて、2シーズン目を迎えた廣本侑優。昨シーズンと同演目の作品も上演しつつ、彼女にとって、オペラ「サムソンとデリラ」（新演出）に出演するのは初めてであった。このオペラの1幕では、ソリストとして踊る場面もあるようだ。
コーラスが舞台の端で唄っている「カルミナ・ブラーナ」の中で踊るのは一体どんな気持ちのなのだろうか？プティパのバレエの一つである「海賊」では3幕しか踊らないので、他の1幕や2幕も出演した





いと言っていた。バレエ団の中でも背の高い廣本は、「白鳥の湖」の2幕では先頭を任されるようになったらしい。これから、レナート・ザネラの「ロミオとジュリエット」もあるそう。お気に入りのバレエではあるが、あまり踊らないので、つまらない、と。
この一年半で一体幾つのバレエ作品に出演したのだろうか？
夏にあった時、顔つきが変わっていた。来夏も、そんな廣本に会うことができること楽しみである。

片桐　優　近況報告（リスボン）



片桐優は、オーディションを経て、ポルトガル国立バレエ団（リスボン）の研修生となった。今の所、一年契約だが、彼女の活躍次第では、その契約が更新される可能性もあるという。研修生のため、舞台に立つチャンスが回ってくるまで時間はかかるだろうが、振付を覚えることは求められる。量も多いため、かなり大変そうではあるが、誰にも負けないほどバレエ好きの彼女にとって、毎日、レッスンし、リハーサルに参加できることは、この上ない喜びであるに違いない。

・バレエ団公演

2月　　NBAバレエ 団　「ホラーナイト」



2～3月　　パリ・オペラ座バレエ 団
「オネーギン」「ジゼル」



5月　　モーリス・ベジャールバレエ 団
「バレエ ・フォーライフ」他



5月　　NBAバレエ団　「白鳥の湖」
8月　　オペラ座VSロイヤル 夢の競演
11 月　　モンテカルロ・バレエ 団
「じゃじゃ馬馴らし」
11月～12 月　ボリショイ・バレエ 団

・年間スケジュール

12月から 1 月
DLSワークショップ
教師の為の講習会



５月　　RADスプリングスクール
５～６月　　RAD試験
８～９月
デモンストレーション
１０月　RAD試験（上級生のみ）
IADMSカンファレンス（千葉）
１２月　　クリスマス会





